

〈報告〉

看護系学生とスポーツ系学生の青年期から成人期にかけての
YG 性格検査の縦断的变化

山岸 明子*・山本 真己**・田中 純夫**

Longitudinal change from adolescence to adulthood in students majoring in Nursing
Science and Sports Science measured by the YG Personality Test

Akiko YAMAGISHI*, Maki YAMAMOTO** and Sumio TANAKA**

Key words: longitudinal change, YG Personality Test, adolescence, adulthood, sense of adaptation

1. 目 的

人間の様々な形質の発達に、遺伝的生得的な要因と環境要因がどのくらい関与しているのか、環境や経験によってどの位変わるのかは、古くから大きな関心もたれてきた。近年分子遺伝学的アプローチによる研究もなされるようになってきているが、心理学においては双生児を使って遺伝と環境の規定性を検討する研究が行われ(安藤¹⁾、また同一の者に対して縦断的なデータを取ってどの位変動があるのか、変動や安定性が何と関連しているかを検討する研究も行われている(遠藤²⁾によってレビューがなされている)。

パーソナリティの遺伝規定性については、気質的な部分は安定性が高い一方、社会的役割に近い部分は環境の影響を受けやすいとされている。パーソナリティ特性の変動や安定性に関する研究は、幼少期ほど変動があり、年齢が進むにつれ安定性が強まることが指摘されている(Capsi, A. & Shiner, R. L.,

2006)³⁾が、社会的役割に関しては幼少期から青年期までと比べて、青年期から成人期にかけては異なった役割をとる機会が多い。つまりそれまでの生徒・学生という役割から、就職し社会人になることに加え、結婚する・親になる等、心理・社会的にそれまでとは異なった様々な経験をし、新しい社会的役割をとるようになる時期である。そのことによるパーソナリティの変化や、新しい役割やそれをめぐる状況に適応できるか否かによるパーソナリティの変化の可能性が考えられる。

山岸(2006a)⁴⁾は对人的枠組みや对人的経験の認知に関して青年期から成人期にかけて縦断的研究を続けているが、その中で少人数ではあるが、1992年短大生時代にYG検査をした者に2005年に再度YG検査に答えてもらい、.4~.5台の相関があり比較的安定している一方、支配性は相関がなく、攻撃性はマイナスの相関が見られる等の結果を得ていた(山岸, 2006b)⁵⁾。浦安キャンパスでは心理学の講義時にYG検査をしてきたが、さくらキャンパスでもしていたことがわかったため、被調査者数を増やして縦断的調査を実施することとした。そして安定している特性—変動しやすい特性は何か、パーソナリティの安定性や変動性は適応感と関連しているのかの

* 医療看護学部

School of Health Care and Nursing

** 教育心理学研究室

Seminar of Educational Psychology

検討を行い、また看護学を学ぶ青年とスポーツ健康科学を学ぶ青年のパーソナリティ特性の比較や、そのような者達の縦断的变化を比較し、看護学とスポーツ科学を専攻するという志向性のちがいや、看護職につくという経験と教員や会社員になるという違いの関与についても検討する。

以上のように本研究の目的は、大学で看護学を学び看護職についた青年と、スポーツ健康科学を学んだ青年が、卒業後約10年経って成人期になり、就職し社会人になる・結婚する・親になる等の様々な経験をjする時期に、YG性格検査の各特性がどの位変動するのか、あるいは安定しているのかを、縦断的データに基づいて検討することである。更にそのような変化が社会的役割の変化に適応できているかに関連するのjかの検討や、結婚し親になるという経験をしている者としていない者の変化の違いについても検討する。また大学で看護学を学ぶ青年と、スポーツ健康科学を学ぶ青年、看護職とスポーツ系職種についた者のパーソナリティ特性の比較や、そのような者達の縦断的变化の比較も行う。

2. 方 法

2.1 被調査者

短大 or 大学時代に心理学の講義で、YG性格検査を行った者の内、現住所がわかった者に郵送で調査の依頼をし、同意して回答した者。看護短大生'95年生39名、'96年生17名(計56名、全員女性)、スポーツ健康科学を学ぶ学生'91年生32名(内女性13名)、合計88名。年齢は2回目実施時看護短大卒業生は30~33才、スポーツ健康科学専攻の卒業生は34~37才。現在の職業は、看護短大卒業生は看護師30名、保健師・助産師6名、会社員他2名、専業主婦17名、不明1名、スポーツ健康科学専攻の卒業生は教員17名、スポーツ指導員2名、会社員他12名、専業主婦1名である。既婚者が65名、子どもがある者30名。

2.2 手続き

大学時代は看護系学生は1年次前期の心理学の講義の体験学習としてYG性格検査を実施し、自ら採

点させて、レポートとして提出させた。スポーツ系学生は2年次のスポーツ心理学の講義時に体験学習として実施した。

成人期は2007年10月から12月にかけて調査の協力依頼を郵送で行い、「協力する」とした者にYG性格検査と質問紙を郵送した。12月から2008年2月に返送を依頼した。

2.3 調査内容

1) YG性格検査の120項目(3件法)、2)現在の適応感として、職場への適応感7項目と全体的適応感5項目について5件法で回答する。職場への適応感は伊藤他(2006)⁶⁾を参考に作成し、全体的適応感は白井(1997)の時間的展望尺度の「現在の充実感」⁷⁾の5項目を使用した。3)自分は変わったかについて4件法、自分の変化についての自由記述。以上から成る質問紙への回答を依頼した。

2.4 倫理的配慮

協力依頼時に、調査の目的を説明し、結果は全体として統計処理すること、研究以外に使用しないこと、書きたくないところは書かなくてよいこと、希望者には採点した結果と学生時代の検査用紙を返却することを伝えた(全員が返却を希望した)。また医療看護学部研究等倫理委員会の承認を得た。

3. 結 果

看護系/体育系別の学生時代及び現在の12尺度と5つの系統値の平均値と標準偏差、2時期の平均値に関するt検定の結果、看護系/体育系の平均値に関するt検定の結果は表1の通り。表2は2時期の系統値に基づく5類型に該当する者の分布度数、表3は12尺度の2時期の相関係数である。

3.1 2時期における学部間の差

学生時代及び現在の12尺度の学部間の違いは、学生時代はD抑うつ性が看護系の方が高く、現在はAg攻撃性とG一般的活動性が体育系の方が高かった。系統値に関しては有意差は見られなかった。

3.2 2学部の縦断的变化の傾向

情緒不安定の尺度はD抑うつ性、C回帰性、I劣等感は、両学部とも学生時代の方が得点が高く、有

表1 12尺度・5系統値の平均値(SD)とt検定の結果

	看護系			体育系			看護/体育の差	
	学生時代	現在	t検定	学生時代	現在	t検定	学生時代	現在
D 抑うつ性	10.73(5.75)	6.50(5.45)	***	8.03(6.03)	4.78(5.13)	**	>*	
C 回帰性	9.64(4.14)	6.73(3.70)	***	9.63(4.68)	5.94(4.78)	***		
I 劣等感	8.38(4.77)	6.46(4.58)	**	7.88(4.54)	4.94(4.35)	***		
N 神経質	8.43(4.89)	7.41(4.60)		8.41(5.16)	6.94(4.49)			
O 主観性	9.41(3.60)	6.66(3.90)	***	9.56(4.27)	5.81(4.21)	***		
Co 非協調性	6.48(3.70)	5.18(3.76)	*	7.72(5.15)	5.66(4.68)	**		
Ag 攻撃性	10.75(3.43)	8.13(4.01)	***	11.22(4.28)	11.19(3.90)			<***
G 一般的活動性	12.91(4.19)	11.73(4.49)	*	13.41(4.89)	14.19(4.29)			<*
R のんきさ	12.80(4.27)	9.29(4.64)	***	13.25(4.32)	10.84(4.80)	**		
T 思考的外向	9.79(4.14)	10.63(4.49)		9.78(4.53)	11.00(4.50)			
A 支配性	12.34(4.37)	11.36(4.72)	*	13.22(5.01)	13.19(4.68)			
S 社会的外向	15.59(4.08)	13.02(5.23)	***	14.00(5.47)	14.53(5.55)			
A値 平均的	4.73(2.22)	4.14(2.48)		4.00(2.05)	3.44(2.06)			
B値 不安定・外向	4.77(1.77)	3.27(1.93)	***	4.78(2.18)	3.94(1.74)	*		
C値 安定・内向	2.48(1.87)	4.59(2.32)	***	3.22(2.20)	4.63(2.25)	**		
D値 安定・外向	4.95(2.98)	5.66(3.39)		5.50(3.00)	6.94(3.21)	***		
E値 不安定・内向	2.32(2.33)	2.20(2.01)		2.22(2.65)	1.59(1.90)			

* P<.05, ** P<.01, *** P<.001

意差がないのはN神経質のみであり、成人期になると情緒不安定さは軽減することが示された。社会的不適応の尺度(O, Co, Ag)も、体育系のAg攻撃性以外は学生時代の方が高くなっており、成人期の方が適応的である。向性の5尺度(G, R, T, A, S)に関しては2学部で共通している結果はT思考的外向の差なしとRのんきさの減少で、看護系は他の3尺度(G活動性, A支配性, S社会的外向)が有意に下がっているのに対し、体育系では差が見られなかった。

5つの系統値の平均値は12尺度の傾向と対応し、両学部とも情緒不安定で外向的なB系統値が下がり、反対のC系統値が上がり、体育系ではD系統値も有意に上がっている。2時期の5つの類型の分布(cf.表3)では、両学部ともD型が増加しており、また看護系ではB型の下降とC型の上昇が見

られた。

3.3 2時期の相関係数

12尺度の2時期の相関係数(cf.表2)に関しては、両学部とも攻撃性以外は有意であった。D抑うつ性以外は体育系の方が相関係数が高く、特にA支配性とS社会的外向は.820, .815と、強い相関が見られた。

系統値は12尺度よりもいくらか数値が下がっているが、DE値は高く、特に体育系で高い。B系統値は看護系は相関がみられないが、体育系では高くなっている。

3.4 2時期間の変化の量と適応感との関連

青年期から成人期にかけての変化が、本人が感じている適応感と関連するのかを検討するために、使用した12項目の因子分析を行った(主成分分析・Varimax回転)(cf.表4)。固有値と解釈可能性か

表2 12尺度・5系統値の2時期間の相関

	2時期間の相関係数		
	看護系	体育系	全体
D 抑うつ性	.562***	.359*	.505***
C 回帰性	.366**	.520***	.433***
I 劣等感	.403**	.657***	.490***
N 神経質	.556***	.601***	.573***
O 主観性	.446***	.628***	.517***
Co 非協調性	.477**	.644***	.560***
Ag 攻撃性	.211	.299	.250*
G 一般的活動性	.526**	.641***	.560***
R のんきさ	.311*	.575***	.411***
T 思考的外向	.308*	.492**	.378***
A 支配性	.586***	.820***	.678***
S 社会的外向	.396**	.815***	.543***
A 値 平均的	.226	.283	.264*
B 値 不安定・外向	.082	.540***	.253*
C 値 安定・内向	.286*	.389*	.321**
D 値 安定・外向	.580***	.775***	.651***
E 値 不安定・内向	.425***	.698***	.523***

* P<.05, ** P<.01, *** P<.001

表4 適応感の項目の因子分析

	I	II	III
毎日の生活が充実している	.835	.189	.115
毎日が何となく過ぎていく	-. 820	-.202	-.093
毎日が同じことの繰り返しで退屈だ	-. 817	-.072	.010
今の生活に満足している	.666	.038	.241
今の自分は本当の自分ではない気がする	-. 544	-.053	-.150
今の仕事に満足している	.016	.796	.132
私は今の仕事に興味をもっている	.301	.794	.039
私は職場のみんなに認められている	-.033	.749	.221
私は仕事を通じて成長していると思う	.320	.723	.194
私の職場の人間関係はよい	.178	.137	.844
私の職場のチームワークはよい	.037	.206	.829
私の職場では皆の意見や要望がとりあげられている	.232	.143	.675
因子負荷量の二乗和	4.39	1.87	1.38
寄与率	36.58	15.58	11.50

太字 .5以上

表3 5類型への分布

	看護系		体育系	
	学生時代	現在	学生時代	現在
A 型 平均型	19.5(34.8)	17.5(31.3)	6.5(20.3)	5.5(19.2)
B 型 不安定・外向	12.5(22.3)	3.5(6.3)	4.5(14.1)	4 (12.5)
C 型 安定・内向	0.5(0.1)	7 (12.5)	1 (3.1)	1.5(4.7)
D 型 安定・外向	20 (35.7)	26 (46.4)	15.5(48.4)	19.5(60.9)
E 型 不安定・内向	3.5(6.3)	2 (3.6)	4.5(14.1)	1.5(4.7)
計	56 (100.0)	56 (100.0)	32 (100.0)	32 (100.0)

混合型は0.5ずつの得点とした
カッコ内はパーセント

ら3因子解を採用した。累積因子寄与率は63.67%である。

第1因子は「現在の充実感」の5項目で因子負荷が高く、「生活の満足」、第2因子は「職場への適応」の内、仕事への満足に関する4項目で高いため「仕事の満足」、第3因子は「職場への適応」の内、職場の人間関係が関与する3項目で高いため「職場の人間関係の満足」と命名し、それぞれの合計得点を算出した。2時期間の変化の量は12尺度それぞれの2回の得点から、2回目の得点-1回目の得点を算出し、適応感の3尺度とYGの変化量との相関係数を算出した。

有意な相関が見られたのは、「生活の満足」と抑うつ性(-.344**), 劣等感(-.220*)がマイナスに、「職場の人間関係の満足」が支配性(.274*), 外向性(.328**)とプラスに関連していた。「仕事の満足」はどの尺度とも関連は見られなかった。

看護系と体育系を分けて有意なものを見ると、共通しているのは「生活の満足」と抑うつ性のマイナスの相関だけであった(看護系-.357**, 体育系-.378*)。「職場の人間関係の満足」は看護系ではのんきさ(.428**), 支配性(.446**), 外向性(.423**)とプラスの相関, 体育系では回帰性(-.370*), 攻撃性(-.388*)とマイナスの相関が見られ、異なった関連が見られた。

3.5 2時期間の変化の量と社会的役割・学部等との関連

学生時代から現在にかけての変化量と、次の変数
1) 学部(看護56名/スポーツ32名), 2) 職種(看護職(看護師・保健師・助産師)36名/スポーツ系職種(教員・スポーツ指導員)19名), 3) 性(男性19名/女性69名), 4) 既婚/未婚(65名/23名), 5) 子ども有り/なし(55名/32名(妊娠中2名を含む))により変化量が異なるかの検討を行った。

学部間で有意差が見られたのは、Ag 攻撃性, G 一般的活動性, S 社会的向性で、看護系の減少量が大きく、一般的活動性と社会的向性は看護系は下降し体育系は上昇していた(表5に有意差が見られた項目の2群の数値と有意確率をあげた)。職種では有意差が見られたのは社会的向性で、看護系は下降し体育系は変化が小さかった。男性-女性の比較ではS 社会的向性が男性は上昇し女性は減少していた。

男性-女性の比較は体育系-看護系とだぶる部分が多く、どちらの要因がきいているのかが不明確なので、看護系(=女性)/体育系女性/体育系男性(56名/13名/19名)で一元配置の分散分析も行った(cf.表6)。有意差があったのはG 一般的活動性, S 社会的向性で、一般的活動性は体育系女性はプラス方向, 看護系女性はマイナス方向に変化し、両群で有意差が見られた。社会的向性は看護系のマイナス方向への変化が大きく、看護系-体育系男性間に有

表5 変化量に関して有意差があったもののグループ毎の平均値(SD)とt検定の結果

	特性	変化大のグループ	変化小のグループ	有意確率	
学部	Ag 攻撃性	-2.63(4.69)	-0.03(4.85)	*	看護>体育
	G 一般的活動性	-1.18(4.24)	0.78(3.92)	*	看護>体育
	S 社会的外向	-2.57(5.21)	0.53(3.35)	**	看護>体育
職種	S 社会的外向	-3.14(5.02)	0.05(3.85)	*	看護>体育
性	S 社会的外向	-2.10(5.00)	0.95(3.31)	*	女性>男性
結婚	N 神経質	-1.91(4.21)	0.87(4.57)	**	結婚>未婚
子ども	N 神経質	-2.18(4.37)	0.63(4.13)	**	子あり>なし

* P<.05, ** P<.01

表6 学部×性のグループ別の2時期間の変化(一元配置の分散分析で有意差があったもの)

	a 看護系(女性)	b 体育系女性	c 体育系男性	a-b	a-c	b-c
G 一般的活動性	-1.18(4.24)	2.15(4.02)	-0.16(.67)	*		*
S 社会的外向	-2.57(5.21)	-0.08(3.45)	0.95(3.31)		*	

* P<.05

意差が見られた。一般的活動性と社会的向性は看護系は下降し体育系は上昇しているが、体育系の傾向は一般的活動性は特に女子において、社会的向性は特に男子において見られることが示された。

結婚群-未婚群及び子ども有り群となし群と変化量との関連を見たところ、N 神経質に関して有意差が見られ、結婚群と子どもあり群は未婚群、子なし群よりも有意に得点が下がることが示された。

4. 考 察

大学で看護学を学び看護職についた青年と、スポーツ健康科学を学んだ青年が、成人期になった時に、YG 性格検査の各特性がどの位変動するのか、あるいは安定しているのかについて、縦断的データに基づいて検討を行った。

学生時代とその10年後を比較すると、両学部とも抑うつ性、回帰性、劣等感のような情緒不安定の尺度が低下し、また社会的不適応尺度の主観性や非協調性も低下、B 系統値の低下、D 系統値やD型の増加が見られ、情緒が安定して、より適応的になることが示された。この結果は、Big Fiveの特性に関し、5ヶ国の横断的研究(McCrae, et al.)⁸⁾で、青年期から成人期にかけて情緒不安定性(Neuroticism)や外向性(Extroversion)が減少するという結果や、大学4年間の縦断的研究(Robins, et al.)⁹⁾で、情緒不安定性(Neuroticism)が減少するという結果と、類似した方向の結果であった。青年期というアイデンティティ模索の時期に比べて、社会における位置が決まる成人期には情緒が安定すると考えられる(但し本研究に協力してくれた被調査者は現在の生活状況が良好な者が多いと思われ、そのことが関与している可能性もある)。

各特性の安定性と変動性に関しては、10年以上という interval があっても2時期の相関係数はかなり高く、特に体育系で高い傾向が見られた。体育系では支配性や外向性の相関は.8台と非常に高く、年齢的变化や経験によらず、変わりにくい特性であることが示された。一方攻撃性に関しては両学部とも相関が低く、12尺度中唯一有意でなかった。(なお看護系の別のデータを追加した研究(N=73)では相関は更に低く、.056と無相関であった)¹⁰⁾。なおAgression 攻撃性はYG性格検査では「愛想の悪いこと」とも表記され「高得点の場合、活動的で決断力もあるが、短気で感情的。他人の意見を聞きたがらず、正しいと思うことは人にかまわず実行したり主張するなど攻撃的である。低得点の場合は自己卑下が強く、ことなかれの行動をとり、ファイトに欠け優柔不断な性質があらわれる」¹¹⁾と説明されており、一般的な「攻撃性」とはいくらも異なっているが、上記のような特性は状況によって変わりやすいといえる。本研究では検討できなかったが、どのような人がどのような状況で変わるのかの検討が望まれる。

看護系と体育系の違いに関しては、1) 学部時代は看護系の方が抑うつ性が高いが他では有意差は見られないこと、2) 看護系は成人期になると向性が内向的になり学生時代よりも消極的になっていること、3) 体育系は攻撃性や一般的活動性が現在高く、学生時代からの変化量においても看護系の変化とは有意差が見られること、4) 体育系の方が平均値の変化が少なく、相関も高い傾向があり、青年期から成人期の変化が少ないこと、5) 大学だけでなく専門を生かした職業について者間でも社会的向性の変化は有意で、看護職の者は得点が下がっていて

内向的になっていることが示された。これらの結果は学問の専攻や希望職種によるパーソナリティの違いは大きくはないが、成人期の職業経験によりある程度の違いが生じ、看護職は消極的なパーソナリティにしやすいことが示唆されている。

2時期間の変化の量と適応感との関連に関しては、「生活の満足」と抑うつ性や劣等感、「職場の人間関係の満足」と支配性や外向性との関連が見られた。抑うつ性や劣等感は両学部とも青年期から成人期にかけて低下しているが、特に生活に満足している者で低下していることが示されたといえる。「職場の人間関係の満足」に関しては看護系は「のんかさ」「支配性」「外向性」とプラスの相関、体育系は「回帰性」「攻撃性」とマイナスの相関と、関連の仕方が異なっていた。看護系・体育系の職場の何がこのことに関与しているのかの検討が必要である。

結婚や子どもをもつこととの関連に関しては、結婚群、子どもあり群の方が神経質の得点が有意に減少しており、神経質というパーソナリティ特性は結婚や子どもを育てるという役割変化や生活の変化と関連があり、生活の変化の影響を受けやすいことが示された。(なおこの結果は妊娠7,8ヶ月とその2年後、3年後を縦断的に検討した結果、女性は怒り・イライラが上昇し、神経質の変化は少ないという結果¹²⁾とは異なるものであった。)

5. 結 論

青年期に看護学を学び看護職についた者と、スポーツ健康科学を学んだ者が、約10年経って成人期になった時に、YG性格検査の各特性がどの位変動するのか、あるいは安定しているかについて、縦断的データに基づいて検討を行った。両学部とも情緒不安定の尺度得点が低下し、情緒が安定してより適応的になることが示された。各特性の安定性と変動性に関しては、10年以上というintervalがあっても2時期の相関係数はかなり高く、特に体育系で高い傾向が見られた。但し攻撃性に関しては両学部とも相関が弱く、状況によって変わりやすいことが示された。看護系と体育系の違いに関しては、体育系の

方が平均値の変化が少なく、相関も高い傾向があり、青年期から成人期の変化が少ないこと、看護職の者は社会的向性得点が下がっていて内向的になっていること等が示された。2時期間の変化の量と適応感との関連に関しては、「生活の満足」と抑うつ性の低下に関連が見られた。

本稿ではYG検査の尺度の変化を縦断的に検討し、看護系と体育系の違いを含めて検討したが、十分にデータが集められず、被調査者が多くないため、全体の傾向を把握するにとどまった。今後被調査者数を増やして、より明確に検討していく必要があると考える。

注

本研究にあたり平成19年度順天堂大学学長研究プロジェクトの研究費の補助を受けた。本研究の一部は日本教育心理学会第50回総会(2008)で発表した。

謝 辞

スポーツ健康科学部の講義時のデータの使用を許可して下さったスポーツ科学科の中島宣行教授に感謝いたします。また調査にご協力いただいた卒業生の皆様に感謝いたします。

文 献

- 1) 安藤寿康(2000)心はどのように遺伝するか—双生児が語る新しい遺伝観(ブルーバックス) 講談社
- 2) 遠藤利彦(2004)パーソナリティ発達研究の現況と課題 日本児童研究所編 児童心理学の進歩2003年版, 1-31, 金子書房.
- 3) Capsi, A. & Shiner, R. L. (2006) Personality development. In Eisenberg, N. (Ed.) Handbook of Child Psychology, sixth edition. Wiley & Sons. P. 300-365.
- 4) 山岸明子(2006a)対人的枠組みと過去から現在の経験のとらえ方に関する研究, 風間書房.
- 5) 山岸明子(2006b)YG性格検査の13年後の縦断的变化 現在及び過去の対人的経験の認知と語り方に関する縦断的研究 平成16年度~17年度科学研究費補助金基礎研究(C)研究成果報告書, P. 48-49.
- 6) 伊藤裕子・相良順子・池田政子(2006)職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影

- 響：妻の就業形態別にみたクロスオーバーの検討 発達心理学研究, 17-1, 62-72.
- 7) 白井利明 (1997) 時間的展望の生涯発達心理学 風間書房.
- 8) McCrae, R. R., Costa, P. T. Jr., Ostenddorf, F., Angleitner, A., Hrebickova, M., Avia, M. D. et al. (2000) Nature over nurture: Temperament, personality and lifespan development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 173-186.
- 9) Robins, R. W., Fraley, R. C., Roberts, B. W., & Trzesniewski, K. H. (2001) A longitudinal study of personality change in young adulthood. *Journal of Personality*, 69-4, P.617-640.
- 10) 山岸明子 (2008) 看護学生の YG 性格検査の縦断的变化—約10年後成人期初期との比較—日本心理学会第72回大会発表論文集, 1215.
- 11) 辻岡美延・矢田部達郎・園原太郎 YG 性格検査手引き書 日本文化科学社.
- 12) 小野寺敦子 (2003) 親になることによる自己概念の変化 発達心理学研究, 14-2, P. 180-190.

(平成20年10月3日 受付)
(平成21年2月6日 受理)